

(第39回未来医学研究会大会より<特集I>)第39回未来医学研究会大会を終えて－JAPANWAY先端医療で未来を照らせ－

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-11-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山森, 伸二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00031710

第39回未来医学研究会大会を終えて — JAPAN WAY 先端医療で 未来を照らせ —

日本光電イノベーションセンタ社長
未来医学研究会 理事
BMC15期修了生

山森 伸二

Shinji Yamamori



未来医科学研究会39回大会を2016年5月21日に星陵会館にて無事終了することができました。

講演して頂いた先生方、大会運営に関わるスタッフの皆様、そして参加して頂いた方々に感謝申し上げます。

今回の大会テーマは「JAPAN WAY 先端医療で未来を照らせ」とさせて頂きました。「JAPAN WAY」とは2015年にイングランドで開催されたラグビーワールドカップで世界中を沸かせた日本代表チームヘッドコーチのエディー・ジョーンズ氏が示した方針です。世界と同じ路線で戦っているだけでは勝てない。日本だけの道(JAPAN WAY)を作り、世界とは違う路線で戦う必要がある。日本人の俊敏性、勤勉性、チームワークを活かして戦うとともに、日々の生活の中から『勝つこと』を意識し、JAPAN WAYを実践することをモットーとしたものです。我々もJAPAN WAYのごとく海外とは異なる手法や仕組みで日本発の先端技術を開発して多くの患者さんを助け、医療に貢献したいと思います。

但し、先端技術と言っても100年前に2000年の世界を予測したイメージが示すように、その殆ど

は現代から見ればほとんどビックリするようなものではなく、未来の予測は過去、現在の延長線上だけでは計り知れません。でも、未来は突然やってくるのではなく、未来は過去と現在の延長線上にあり、未来予測には過去と現在を知ることが一番の近道であることも事実です。

エディー・ジョーンズ氏は、2012年に全日本のヘッドコーチに就任すると、「JAPAN WAY」で2015年にトップ10入り、2019年にトップ8入り、という具体的な目標(未来予測)を掲げるとともに、日本人の特性を伸ばすための豊富な練習量と相手の弱点を見つけそこに付け入るための入念な作戦に基づいた準備を徹底して行いました。その結果、2015年のラグビーのワールドカップでの大逆転が生まれたのです。つまり、未来を予測しそれを実現するためには、未来に向けての目標が明確であるとともに周到で綿密な準備(計画)と各ステージで実現すべき一連のタスクの実行が不可欠なのです。

さて本大会を振り返ってみて、招待講演の平田先生からは「体内埋込型ブレイン・マシン・インターフェースの開発」について解説して頂きまし

た。海外では脳組織に直接剣山のような電極を差し込んで信号を取り出し患者の意志でロボットアームを動かす手法が進められていますが、電極が脳組織にダメージを与えて長期利用の面で問題があります。一方、平田先生等は多数の電極を脳表面に配置することで脳に直接的なダメージを与えずに長期的に安定して信号を取り出す手法を開発中です。弊社もこの開発に一枚加わっていますが、患者目線を優先した世界に誇る研究開発であると期待しています。

特別講演の小池先生からは、全体を見る「鳥の眼」、細部を見つめる「虫の眼」、流れをつかむ「魚の眼」のお話を頂きました。まさに未来を予測しそれを実現するために必要不可欠な見方、考え方です。講演当時は国会議員であった小池先生は現在は東京都知事として、「鳥の眼、虫の眼、魚の眼」で未来の東京を俯瞰し、未来を創出しようとされています。益々のご活躍を期待致します。

講演して頂いた個々先生方の発表内容については本誌の紙面に譲るとして、ご講演の中で随所に未来に挑戦するための具体的な課題とその解決のための準備(計画)が述べられていた様に思います。あとは計画通りに各ステージでの成果を実現することで、未来がグッと現実的なものに近づいてくるのではないのでしょうか。

一方、未来を担う若手研究者や技術者の育成も喫緊の課題です。東京女子医科大学のバイオメディカル・カリキュラム(BMC)はすでに半世紀近く前にスタートし、企業を中心としたその卒業生はすでに数千人規模となっています。日本の医療機器産業界においてこの卒業生たちの寄与や貢献度は計り知れません。アカデミアと企業、医師とエンジニアとの垣根を超えた融合なくして新技術開発はなかなか進みませんが、この半世紀の歴史と経験と成果は米国のバイオデザインプログラムにも決して引けをとりません。但し、BMC自

体も世の中の変化を捉え、「JAPAN WAY」の如く新たに挑戦すべき方向性をいち早く予測し、その実現に向けての日々の改善・改良の努力を忘れてはいけません。

最後になりましたが、本大会の開催にあたり、多大な御尽力を賜りました先端生命医学研究所の先生及びスタッフの皆様には厚くお礼を申し上げます。

略 歴

- | | |
|-------|---|
| 1979年 | 東京都立大学理学部物理学科物理学修士課程修了
同年日本光電工業(株)入社 |
| 1984年 | 東京女子医科大学バイオメディカルカリキュラム
卒業 |
| 2006年 | 東京女子医科大学大学院先端生命医学系専攻
先端工学外科学分野修了 |
| 2009年 | 日本光電工業(株)荻野記念研究所所長 |
| 2011年 | 日本光電工業(株)執行役員 荻野記念研究所所長 |
| 2014年 | 日本光電工業(株)執行役員 荻野記念研究所所長
及び日本光電イノベーションセンタ社長 |
| 2015年 | 日本光電工業(株)上席執行役員 荻野記念研究所所長
及び日本光電イノベーションセンタ社長 |
| 2016年 | 日本光電イノベーションセンタ社長 |

所属学会

- 一般社団法人日本生体医工学理事
- 一般社団法人日本医療機器学会理事
- 一般社団法人未来医学研究会副会長